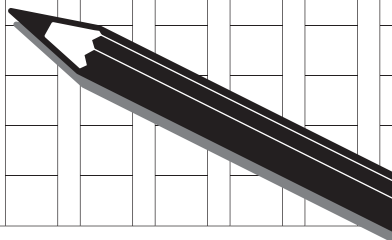


令和5年度

第9回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館

姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第九回目を迎えた今回は、全国から一七六四点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自身をつくり続けているはず。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「自然に寄り添う幸せ」

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年 山本 佳歩 …… 4

優秀賞 「後悔しない生き方を」

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 一年 木村 歩睦 …… 7

佳作 「私の意識改革」

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 二年 中島 彩乃 …… 11

■高校生部門

最優秀賞 「言語偏愛者による新聞論」

兵庫県立姫路西高等学校 一年 百瀬 泉里 …… 15

優秀賞 「五時のブランコ」

兵庫県立神戸高等学校 一年 林 凜音 …… 19

佳作 「ただ、ストイックなだけ」

東京都 東京大学教育学部附属中等教育学校 五年 吉住 恒思 …… 23

■一般部門

最優秀賞 「インド夜想曲」

埼玉県 狭山市 (主婦) 藤村 貴子 …… 27

優秀賞 「家族のコーヒーリレー」

カナダ モントリオール市 (自営業) 藤田 邦子 …… 31

佳作 「霊供膳と麦酒」

東京都 世田谷区 (会社員) 稲葉 真季 …… 35

■概要

……… 39

第九回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年

自然に寄り添う幸せ

山本 佳歩

日本人の自然に寄り添い生きる暮らしと日本語の美しさは、深い結び付きがあると思う。私は、昔の人々が季節や自然を敏感に感じ取ってたくさん言葉をつくり、残してきたことに尊敬の念を抱いている。

以前、日本経済新聞の広告に夜明けを表す言葉として「暁」「天明」「黎明」など、たくさんあると書かれていて妙に納得した。夜明けといっても様々な夜明けがあるからだ。

また、雨を表す言葉は「緑雨」「紅雨」「桜雨」など数多くある。言葉を見聞きして風景を想像することもできるし、風景を眺めて言葉を思い浮かべることもできる。自分がその風景に立ち会った時、知っている言葉と一致することに気付いたら、一気に感動が広がる。自己満足だと思うけれど、その瞬間が切り取られずと心に宝物として残る。幸せを感じられる。明け方や夕暮れ時の空は、燃えるようなオレンジ色、ピンク色から紫色へのグラデーションが美しい。しかし、その景色を写真に撮ると、実際に見るより色が薄くなってしまう。自分の目で見て、耳で聞いて、手で触れて、香りを楽しんで、舌で味わう五感で

感じなければ、自然の壮大さは分かりきれないのだ。

私の母は秋田県出身だが、子供の頃、雪深い長い冬が終わり雪が解けて土が微かに見えにくると、春の風の匂いを感じたらしい。それは今から考えると土の匂いだったと思うけれど、春の訪れの喜びと結び付いて、鼻をくすぐるその匂いを今でもはつきり思い出せると言っている。また、雪にも色々な降り方があるらしい。さらさら、ぽつぽつ、べちゃべちゃ、しんしんなどだ。特に音もなく静かに降る雪は、もちろん音はないのだけれど、窓から眺めていると「しんしん」という音がちゃんと聞こえてきたと言っている。私は雪がほとんど降らない関西で育ったので、雪国で生活していた母をうらやましいと思った。きつと何年も生活してこそ感じられる情景もあるのだと思う。

また、日本には古来から伝わる色がある。それぞれに名前が付けられているが、昔の人の名前の付け方のセンスに脱帽する。「若芽色」「樅花色」「薄藤色」など、どの色の名前も繊細で素敵だと思う。そして、栗の色には「栗色」「栗皮色」「落栗色」「蒸栗色」があり、比較すると違いが分かるが、これを見分けていたということに驚いた。伝統色は約四百六十色以上あるという。昔の人がこんなにはたくさん色の名前を付けることができたのは、自然をよく見て触れることが多かったからではないだろうか。似ている色でも、少しの違いを大事にして一つ一つに名前を付けてきたのは、やはり自然を身近なもの、特別な

ものとしていた証で、それだけ生活に馴染んでいたのだろう。

それから、季節を感じるものに旬の食べ物がある。これらは私たちの身も心も豊かにしてくれる。私は山菜が大好きだ。春になると、たらの芽、ごごみ、こしあぶら、ウドなど毎年いただくが、箱を開けると山菜の香りがあふれ、柔らかくて少し苦い山菜を口に入れると春でいっぱいになる。私たちに春を届け、満たしてくれるので山の恵みに感謝している。また、買い物に行つてびわやスイカ、柿などの果物が売っていたり、ゴーヤや松茸などの野菜からも季節を知ることができる。秋には学校からの帰り道、家々から秋刀魚の焼ける匂いが漂ってくる。私は季節を感じ、移り変わりに気付いた時、うれしい気持ちになる。そして、その気付きやうれしさを私の家では度々共有することがある。例えば、今年初めて蝉の声を聞いた話や、大きい入道雲を見たこと、金木犀の香りがしたことなどだ。共有することで一緒に季節を感じることができてとても楽しい。

日本には四季があり、季節は日々めぐり、自分がアンテナを張って周りを見渡すと、たくさんものを受け取ることができる。私はこれからもきれいな日本語を知り、日々の季節の移ろいを細やかに感じ取りながら、昔の人々のように自然に寄り添って生活していきたい。

中学生部門

優秀賞

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 一年

後悔しない生き方を

木村 歩睦

それまで、僕にとって人の死というものは、自分と関係のない遠いことだと思っていた。去年の二月、僕の家にも母方の祖父が住むことになった。それまでに何度か祖父は入院し、その度に手術をしていたことは知っていた。何かの病気なのだとは分かっていたが、詳しいことは知らなかった。

祖父が僕の家に住むことになったと母に聞かされた時、

「おじいちゃんはずい臓がんで、長くはないから、家にいる間たくさん話をしてあげて。」と、言われた。弟はそれを聞いて泣いていたが、僕は泣けなかった。身近な人が死ぬという実感がわかなかつたからだ。

祖父を迎える準備が始まった。弟は泣いたことが嘘のように、祖父が来るのを楽しみにしていたが、僕は祖父にどう接したらいいか悩んだ。死を間近にした祖父に、どんな顔で会えばいいか分からなかつたからだ。

悩んでいた僕とは裏腹に、退院して家に来た祖父はとても元気で明るかった。弟は大喜

びで祖父の部屋に入り浸り、一緒にテレビを見たり、大好きなサッカーの話で盛り上がりたりしていた。僕も時々、祖父の部屋をのぞいて話をしたが、いつもどんなことを言えがいいのか悩んで、なかなか自分から話しかけることができなかった。ただ、僕に出来ることはやろうと思った。週に二回、訪問看護でお風呂に入る。父も母も仕事でいないので、お風呂を沸かすのは僕と弟でやった。お風呂上がりには気持ちよさそうな顔をしている祖父を見るのが好きだった。二か月ほどそうやって、穏やかな日が続いていた。

「歩睦は、優しい子や。弟の方が気持ちを表現するのが上手やし、甘え上手やけれど、それを見て弟に怒るわけでもなく、譲ってあげている。でも、たくさん我慢をしているやろうから、歩睦のこともよく見てあげて。」

と、祖父が母に言ったそうだ。たった二か月ほどしか一緒に過ごしていないし、僕からコミュニケーションをとっているわけではなかったのに、祖父が僕のことをそう思っていてくれていることが嬉しかった。

四月になつてすぐ、急な高熱で救急車を呼び、祖父はそのまま入院することになった。僕と弟が寝ている間の出来事だった。この時は、落ち着いたらまた家に戻ってくると思っていた。でも、祖父は僕の家には二度と戻ってくることはなかった。

容態が落ち着いた祖父は、退院ではなく緩和病棟に移ることを希望した。今までいた場所に祖父がいない。学校から帰ったら「おかえり。」と迎えてくれた祖父がいない。そう思うと、寂しい思いでいっぱいになった。

コロナ禍だったが、制限付きで緩和病棟へ見舞いに行くことができた。母が行くときは僕も弟もできるだけついて行っただけだった。行く度に祖父はおやつやカードを買ってくれていた。僕は元気そうな祖父の姿に安心していた。

しかし、六月に入り祖父の様子は変わり始めた。話しかけても、ボーっとして返事をしなくなってきた。そんな祖父を見ると、涙が出そうになった。みんな、祖父の最期が近いことを感じていた。

七月一日の朝、仕事に行っていた母から、祖父が亡くなったと連絡がきた。一緒に病院に行くか聞かれて、すぐに行くことと返事をした。

病院に安置された祖父は穏やかな顔をしていた。苦しむことなく亡くなったそうだった。それまで、たくさんの痛みを耐えてきたことを思うと、最期に苦しまずいられたと聞いて、よかったと思った。

「今までお疲れ様。」

と、声をかけた。悲しかったけれど、これで祖父がもう苦しまずにいられると思ったら、自然と言葉が出てきた。

あつという間の五か月だった。祖父と過ごした時間はとても短い。でも、祖父からもらった愛情はとても大きかった。四十九日にお坊さんから「俱会一処」という言葉を教えてもらった。またいつか祖父に会えるなら、僕のことを分かってくれた感謝を伝えたい。僕は、祖父になかなか話しかけることができなかったことを後悔している。だから、たくさん話をしたい。

祖父は自分の生き方に後悔していないのだろうか。ずっと一人暮らしをしていた祖父が、最後に孫と一緒に暮らせたのは幸せだっただろうと母から言われた。最後に幸せだったのなら嬉しい。

いつか人は死ぬ。僕もいつか死ぬ。その時に後悔せずにいられるだろうか。祖父との関わりに後悔することはたくさんある。だからこそ、これからそんなことがないように生きていきたいと思った。そして、僕のことを優しいと言ってくれた祖父のように、相手の本質を見抜ける、相手のいいところを見つけることができる、そんな人になりたいと思う。

ありがとうおじいちゃん。

中学生部門

佳作

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 二年

私の意識改革

中島 彩乃

「とられた。」

私は、授業中自分の意見に自信がないので、私の小さな声は周りの声につぶされ、先生には届かなかった。

ある日の授業で、教科書本文を聞いて先生の質問に答えるということがあった。自然と自由に発言する形式になっていた。

私は自分の意見を言葉に出した。しかし、私の周りの人には聞こえていたが、その先の先生までは届かなかった。

その後、誰も正解を出すことができず、先生が答えをおっしゃった。その答えは、私の意見と同じだった。その時私は、「聞こえていなかったのなら仕方がないな。」と、そこまです気にしていなかった。

次の問題に移った。私はもう一度、意見を言った。前よりも大きな声で発言した。しかしそれでも私の声は他の人の声でかき消されてしまった。

しばらくすると、他のクラスメイトが私と同じ意見を言った。先生はその意見に、「正解。」

と言った。「とられた。」私はそう思い、悔しくなった。

もし、私をもっと大きな声で発言し、先生に届いていたら、「正解」の言葉をもらい、自分の意見に自信が持てたかもしれない。さらには自分自身にも自信が持てるようになってたかもしれない。

でも現実には、声は届かず悔しい思いをした。それ以上に、自分に自信を持つことができなかつた情けなさに腹が立った。

私はこのような経験を何度もしてきてしまった。この失敗は今回で最後にしたい。

二年足らずで高校生活が始まるが、このまま変わることができずに過ごしていたら、自分の意見を言うこともできず、本来の自分の実力が発揮できなくなってしまうだろう。そんな経験が、またその先の就職などにも影響し、失敗を続けてしまうかもしれない。その負の連鎖を止め、新たに心を入れ替えることができるように、中学校生活の中で自分の意見を持ち、周りに伝える力を身につけていくべきだと思う。

そうなるためには、小さなことにも疑問を持ち、それに対する自分の考えを言葉にして表現できるようにすればよいと思う。

なぜ、人前で発言することが少なくなったのか、原因を自分に問いかけてみた。

「人前に出ることが恥ずかしいから？」

「注目されることが嫌だから？」

「間違えることが怖いから？」

「考えを言葉にすることが苦手だから？」

色々原因を考えてみたが、自分にあてはまっていることはこの四つのような気がする。

このような原因を無くす為に、意識改革をしようと思う。

人前に出ること、つまり注目されることはみんなの代表として前に出る訳で、後ろめた
いことは何も無く、逆に誇らしいことなのだから、自信を持って発言するようにしたい。
また、間違うことは悪いことでも、恥ずかしいことでもないのだから、恐れる必要はない。
しかも、間違うことで印象に残り、次に生かすことができると思う。それを繰り返すこと
で、間違いに対する恐怖心が無くなり、それを前向きにとらえ、落ち込みすぎず、気にし
すぎず、向き合うことが大切と、考え方を変えようと思う。

また、自分の考えを上手く文章にまとめることができなくても、きれいな文章にしよう
と意識して頑張るのではなく、単語だけでも思ったことをそのまま言うだけで良いと考え

るようにすると気持ちも楽になると思う。

このようにして、自分に自信が持てる人になれば、必要以上に失敗を恐れることもなくなり、新しいことに挑戦しようとする気持ちが生まれ、より自分を成長させることができるのではないか。その挑戦の中で失敗があっても、その経験を生かし、何事も前向きに考えられるようにしたい。そして、この先の私の未来に巻き起こるたくさんの出来事に、大きな不安を持つことなく、胸を張って乗り越えていきたい。

今できることは、今すぐやろう。将来の私の為に。努力することはとても素晴らしいことだから、たくさん努力しようと思う。

大人になったときに、「あの時考え方を変えてよかった。」と思えていたら、私の意識改革は大成功だ。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県立姫路西高等学校 一年

言語偏愛者による新聞論

百瀬 泉里

朝、目が覚める。つつかけをひっかけ、家を出る。新鮮な空気を吸い、ポストを開ける。朝刊を取り出してもう一度深呼吸。私はこの瞬間がとても好きだ。

私の周りには、幼いころから本があった。どこか知らない場所へ連れて行ってくれる物語だけでなく、紙の少しざらりとした手触りや、ふとした瞬間に香り立つ紙やインクのおいは私を魅了してやまない。そんな本と同じくらい私を惹きつけるのが新聞である。架空の物語とは異なり、事件や事故といった現実の話を、読み手を喜ばせることよりも、簡潔にわかりやすく伝えることを旨とした固めの文体。文庫本の柔らかく吸い付くような感触ではなく、辞書のようなぬめりを持った滑らかな感触でもない、こすれば手に黒いインクが付くほどのざらざらした手触り。そして一枚一枚めくると立ち上る、独特の香り。それらすべてが、私の琴線に触れるのだ。

私が新聞を初めて読んだのは小学校低学年の頃だったと記憶している。それまでは父が夕食時に読んでいる黒っぽい大きな何か、でしかなかった新聞。そこにはまだ見ぬ世界が

悠然と広がっていた。その世界に一步踏み出した時の衝撃は忘れられない。そこには、日頃テレビで見ているものと同じようなことが書いてあった。しかし、映像という視覚情報がないなかで、文章のみで構成された記事から、眼前にまざまざと浮かぶ光景にただただ圧倒された。それ以来、私は朝一番に朝刊を読む生活をかれこれ十年近く続けている。

私にはお気に入りのコーナーがある。それは社説と書籍紹介コーナー、そして社会面である。

まず、社説は各新聞社のそれぞれ違った意見がよく伝わってくる。最近起きた時事問題に関して、故事や名著の一節を交えたり、著名人の言葉を引いたりしながら、ユーモラスかつ鋭く主張を展開しているのが特徴だ。私の家では一紙しか購読していないが、学校や図書館などで複数紙の社説をしばしば読み比べる。同じ話題でも、切り取り方が違ったり、異なる言葉を引いて解釈が正反対になっていたりして、とても興味深いのだ。社説は字数が限られているからこそ、練りに練られた美しい表現がなされており、引用された文章から機知に富んだ名台詞に出会うことも多い。くすりと笑えたり、なるほどと膝を打ったり、そんな体験のできる社説には、時間がなくとも必ず目を通すようにしている。

次に、書籍紹介コーナーでは編集部や専門家による本への熱量に溢れた文に、読みたい本が増えていく。私はともすれば特定の作家の本ばかり読んでしまいがちであるので、こ

のコーナーは新たな扉を開く貴重な機会となっている。ホラーや自己啓発など、普段あまり進んで手に取ることのないジャンルの本の紹介文をきっかけに、新たにお気に入り作家ができることも珍しくない。特に編集者が書いた紹介文は、本を書くに至った経緯や裏話などが書かれていて、見えにくい作家の顔が見え、とても面白い。

最後に、社会面は直近の事件や過去の出来事の検証記事が載っており、テレビを見ることが少なくなったら私にとっては、唯一に近い情報源である。社会面は淡々と事実を伝える文章がほとんどであるが、同時にそれらの文章は写実的でとてもわかりやすい。多数の記事が載った面から気になった記事を選んで読む楽しさは、ここでしか味わえないものだ。はたまた、まったく気にかけたことのなかった社会問題に出会い、新たな視点や価値観を得ることもある。そのような社会面を通した巡りあわせの数々は、ひどく魅力的で、刺激的でさえもある。新聞は、一日に何度もニュース番組があるテレビとは異なり、伝える機会が少なく、情報は必然的に遅くなる。しかし、遅いからこそより精緻な情報が得られるようにも思う。

新聞は、言葉の妙を結集させた文章という内面と、薄く粗い紙という素朴な外面を併せ持つ愛すべき存在である。いわば、言葉の価値を再認識させてくれる尊ぶべき文化なのだ。情報が氾濫したネット空間や現実世界の煩わしい人間関係の喧騒から離れて、静謐な言葉

の海に溺れられる新聞。私にはどこか、日常生活で疲弊した心を新聞によって癒している部分があるのではないかと思う。

このようにして、言葉を大事にし、言葉によって守られながら一歩ずつ歩んで行こう。

高校生部門

優秀賞

兵庫県立神戸高等学校 一年

五時のブランコ

林 凛音

午後五時。特に予定がない日、私は近所の公園でブランコに乗っている。とはいえ私が行くその公園は小学生が多く訪れるので、高校生の私がブランコに乗れるのはほんの一瞬だ。運が良ければ延々と乗っていられるが、大抵は五、六人の小学生達に囲まれて終わるのが常だった。

私がこの習慣めいたことを始めたのは中学三年の一月からだ。手が悴むほど寒い中、私は半ズボンとカットソーにパーカーという軽装で、約六年ぶりのブランコに乗った。正しくは、受験期の真只中、私は体調を崩したくて衝動的に公園へ行ったのである。塾の冬期講習も佳境に差し掛かり、初めて感じる現実味を帯びた閉塞感に押し潰されそうになっていた私は、心底小学生や園児達が羨ましかったのだ。遊ぶことが仕事で、まだ成績とは無縁な彼らはその頃の私にとって羨望の塊だった。公園ではしゃぐ彼らを見ていると、「私もあの子達みたいに遊びたい。」と思うようになった。その思いの象徴が、勢いよく空気を割るブランコなのだった。

時計の針が夕方五時を指し示す頃、公園はいつも親子連れや小学生達で賑わう。だが、私にとってそれが良い方向に働くことはない。何故なら、賑やかな彼らが私の唯一の目的であるブランコを占領してしまうからである。勿論常識的に考えれば優先されるべきは彼らの方だ。私は不承不承待つことにした。ただ、待っているんだというアピールはしていたかったので、すぐ脇で地面に落書きをしながら待っていた。その時私はイヤホンから流れてくる懐かしいメロディにどっぷりと浸っていたので、このまま二時間でも三時間でも待てる気分であった。しかし冬のさなか周りは既に少し薄暗く、肌寒さと退屈も相まって私は徐々に冷静さを取り戻し、思考は現実には埋め尽くされていった。その内私は時間の経過も気づかないほどの不安から、地面の一点をじっと見つめ、それまで手慰みに描いていた猫や好きなキャラクターを全て踏み躪っては図形や関数に置き換えていった。周りにいた子供の一人が私を不思議がって見ているのも知っていたが、気にならなかった。

ブランコが空いていることに気づいたのは、落書きをし続けた結果目の届く範囲に空白の地面がなくなった時だった。「帰ろう、帰らなければ。」と我に返り思ったが、空いているブランコを見た瞬間、私はそこに腰掛けてしまっていた。丁度その時、小さく声が聞こえた。反射的にイヤホンを外し声のした方へ顔を向けると、四歳ほどだろうか、幼い男の子が立っていた。近くに母親はいなかった。その子が輝く瞳で私の足下の地面を指差しな

がら言った。

「手伝う。」

その子の指差す先には、前日からの雨で大きな水たまりができており、彼の身長ではブランコまで辿り着くことさえ難しい状態なのだった。私がブランコに腰かけたまま茫然としていると、彼は水溜りを埋めるべくせつせと砂を運び始めた。しかしその水溜りは到底彼では埋めることのできない大きさで、さすがに私も放置する訳にもいかず、ブランコから立ち上がり手伝うことにした。

「ここにスコップあるよ。」

「うん。」

「おてて、汚れるよ。」

「だいじょうぶ。」

「お友達呼んでいるよ。行かないの？」

「これやる。」

「もうお姉ちゃんブランコ乗れるよ。」

「まだいっぱいじゃない。」

「…そうだね。」

二人で砂を運び、気がつけば二十分ほど経っていただろうか。私も彼も手が砂まみれになつてしまつていた。結局彼が砂を運ぶのを止めたのは、彼の母親が彼を呼び寄せたためだった。しかし「やつと帰るのかな。」という私の思いとは裏腹に、彼は一向に帰る素振りを見せない。それどころか、彼は私と遊びたいと言ひ出す始末。どうしても彼と離れたかつたその時の私は、思わずこんなことを口走つていた。

「じゃあ、また来週ここで会おうか。」

その言葉に元氣よく頷いて母親の方へ駆けていく背中を見送り、ほつとした私は、再びブランコに座り直した。辺りは随分静かになつていた。きいこきいこと揺れるブランコの音を聞きながら、私はもう何も見えない空をぼんやりと眺めていた。楽しくなかつた。だから、また来週来ようと思つた。

結局私は、次の週もそのまた次の週も、今日に至るまで一度も彼の姿を見ていない。

二つの季節を越え今は夏。新たな制服を身に纏つた私は、あの日とは違ふ気持ちで思い切りブランコを漕いでいる。周りの地面いっぱい、今日も数式が踊っている。

高校生部門

佳作

ただ、ストイックなだけ

東京都 東京大学教育学部附属中等教育学校 五年

吉住 恒思

「そっちの手を、ほら、しっかりと添えて」

玉ねぎを切るだけなのに、かれこれもう十五分以上練習させられている。とうとう耐えきれなくなつた小学生の僕は、深いため息をつくとき、べそべそ泣きはじめた。

「このくらいで、そんな態度しないの！」

母は、キッチンの天板をドンと叩いた。

ストイック——まるで、母のために創られたような言葉だ。主婦になる前、母は和食の店で板前の仕事をしていた。そのせいかはわからないけど、ことのほか厳しい。

「こんなの口に入れば、みんないっしょだよ！」

と、僕が逆らうと、母は僕の手から包丁を奪った。まるで熟練のミュージシャンがドラムを叩くような見事なリズムで、玉ねぎを刻むと、そのひとつづつを僕に見せた。

「あなたの切った玉ねぎと、比べてみなさい」

母が切った見事な正方形のみじん切りに比べると、僕の切ったものは三角形だったり、角が潰れていたり、ぶざまに不揃いだった。

情けない僕の表情を汲みとると、

「口に入っても、ちがうのよ。だから、神は細部に宿るの。料理は愛情なのよ」

と、母は諭した。

僕はもうそれ以上、なにも言えない。

そんな母でも——いや、そんな母だからこそ、中学受験は世話を焼いてくれた。

だが、よりもよって受験前日、母は行き先も告げずに、突然、家からいなくなった。

父の作った不味いカレーを食べながら、母の帰りを待っていると、その心細さといった
らなかった。

だれしもそうだと思うが、子どもにとって、母親という存在は、宇宙くらいに大きい。

小学生といえ、それはもうなおさらだった。

夜遅くに、母はようやく帰ってくると、まるで何事もなかったように明日の準備をはじめた。しかも、とても不機嫌そうに、

「明日、受験だから、もう寝るわよ」

とだけ言うと、寝室のライトを消した。

その夜、僕はうなされたらしい。一度だけ、目を覚ました。だが、母がとりにいる安心感で、ふたたびすぐに寝入ってしまった。

五年後――

高校生になっても、僕と母の関係は変わらない。その日も、母は散々、僕に向かってお説教をしたあと、慌ただしく着がえた。

「きょうの夜はカレーだから、適当にパパと食べておいて」

と、言っただけ、法事に出かけてしまった。

父が帰ってくると、僕はふたり分のカレーを温めなおして、トレイに置いた。

目の前に出されたカレーを、父はスプーンですくって口に運ぶと、「うん、うまいうまい」と、二、三度うなずいた。

たしかに、母が作ってくれたカレーは、へたなお店で食べるものよりも、ずっと美味しい。

僕は、不思議になってきた。

「どうして、あんな怒ってばかりのひとを好きになったの？料理がうまいから？」

「そうじゃない」意外にも、父はきっぱり言った。「別に、安っぽい結婚雑誌に書いてあるような、『胃袋を掴まれた』とかいう理由じゃないよ」

「じゃあ、どうして？」

僕の問いに、父はなにか思いだすと、

「お前の受験前日、突然、ママがいなくなったことがあっただろ？」

「そうだね。信じられなかったけど……」

「あの日、ママの親友が亡くなったんだ。心臓発作でね」

僕はあつと、声にならない声を口走ると、

「きょう、法事がある……中学の同級生だったっていうひと？」ときいた。

「——そうだよ。訃報の電話を受けてから、『明日の受験に、影響があるから』って、ママはトイレに籠って泣いてたんだ」

「そんなことが……」

「あの夜、告別式から帰ってからも、ママは布団に顔を埋めて、嗚咽を堪えてたんだ」
すべて、合点がいった。うなされていたのは、僕ではなかったのだ——

「パパはそういう、ママのストイックなところが、好きなの？」

「ストイックさも、裏返せば、情が深いっていうことだろ？お前も、女でも男でもいいから、それくらいひとを好きになってみせろ」

スプーンの上に浮かんでいる、正方形の几帳面な玉ねぎを見た。

「神は、細部に宿るね……」

僕はまだ、他人の愛というものが理解できない。ただ、母の愛は理解できる。

母が帰ってきたら、また料理を教えてもらってもいいかもしれない——僕はそっと思いなおした。

一般部門

最優秀賞

埼玉県 狭山市

インド夜想曲

藤村 貴子（主婦）

図書館でふと目に留まり、『インド夜想曲』（アントニオ・タブツキ著）を手にとった。失踪した友人を探し、インドをめぐる男性の物語である。わずかな手がかりをもとに、未知の土地をさまよう。混沌とした街、熱気と喧騒。小説を読むうちに、私の心は八年前に飛んでいた。

タージ・マハルを観光した日の夜、アグラ駅でニューデリー行きの特急を待った。二時間ほど待ったが電車は来ない。だが文句を言う人はない。みな当たり前のように待っている。インドではよくあることのようにだ。

ホームに立っていると、満員の列車が入って来てとまった。ぎっしりと詰め込まれた人であふれ返っている。しばらく停車するのだろうか。サリーを着た女性が、電車から飛び降りた。線路と線路の間にある水道で、頭から水を浴び、ずぶ濡れのサリーを絞ると戻っていく。気にとめる人もない。

ふとホームの外れを見る。はるか向こうから、何かが這うように徐々に近づいてくる。動物かしら、と目を凝らした。男の子だ。一〇歳くらいだろうか。両足がなく、両手でいざりながら、ホームで待つ人々に手を伸ばしている。いくらか渡す人もあれば、まったく相手にしない人もいる。どこから出てきたのだろう。ホームに上がることなど、到底できそうにない。

子どもは私の前に来て、両手を伸ばし、まっすぐこちらを見た。その目は澄みきっている。媚びるものも卑しい色もない。悲しげでもなかった。なんとも平和なものを湛えている。静かな湖面をのぞいているようだった。

子どもの手に、紙幣を持ちやすく丸めて握らせた。言葉はない。目だけである。

そこには与える者も施しを受ける者もなかった。少年の目は私の思いを受けとり、ひときわ柔らかな輝きを放ったように見えた。子どもは両手を合わせて私をじっと見つめる。そして深く頭を下げた。私も両手を合わせ、少年を見つめて深く頭を下げた。私は誰を見つめているのだろうか？ そんな不思議な感覚に包まれた。

やがてようやく特急がきて、ニューデリーに戻った。「ホテルまで」とタクシーに乗る。運転手は白人とのハーフだろうか。まだらに日焼けした肌、乾ききった亜麻色の髪。曇ったフロントガラスに、色とりどりの羽根とインドの神様がゆれている。あてどない感じが

漂う、静かな運転だった。

深夜である。窓の外を見ると、サイクルリキシャ（自転車後ろに人を乗せて走る）がとまっている。その上で寝ている人たち。商売道具が全財産なのだ……。

帰国の日、ホテルから空港まで、黒塗りのタクシーに乗った。陽気で愛想のよい運転手に、旅程や旅した場所を聞かれ、三泊四日だと話す。

「なんてクレイジーだ。ジャイプールは？ バラナシにも行かなくては」
クレイジー、その通りだった。行こうと思って、来たのではなかった。

前年、次男を事故で亡くした。混乱し、家の中はしとしとと雨が降り続いていた。二月も終わる頃になり、家族の中で誰ともなく、「どこかへ行こう」となったのだった。

どこでもいい、できるだけ遠くへ。だが、ゴールデンウイークはどこも予約でいっぱいだった。唯一空きがあったのが、デリー行きだったのである。

ふらりと入ったレストランは、どこか怪しげな気配が漂っていた。後日スキミングが発覚したが、たぶんあの店だったのだろう。

水には気をつけていたのに、帰国後はひどい下痢と高熱に苦しんだ。臥している、その目の前や天井を、無数の人がぐるぐる回る。

四人乗りで疾走するバイク。物乞い。道路から噴き出す水で洗濯をするひと。地面に寝かされている赤ん坊は、手足をばたつかせ、空を見て笑っている。

道の端には死にそうな人が横たわり、その前を野良犬がうろついている。

クレイジー、いいじゃない。みんな自分の世界で、自分の人生を生きている。

二〇一五年、高温で道路のアスファルトが溶け、インドでも暑いといわれた夏だった。

一般部門

優秀賞

カナダ モントリオール市

家族のコーヒーリレー

藤田 邦子（自営業）

私が小学生の頃、母が不動産詐欺にあった。こつこつ貯めた貯金に、借金までしてこしらえた資金を、偽の不動産屋に全て持ち逃げされたのだ。

母は、心労から胃潰瘍を患い、急遽入院、手術することとなった。母の入院中は、父は仕事帰りに母を見舞ってから帰宅し、兄と私の遅めの夕食を準備した。私と、続いて兄が寝た後、父は毎晩遅くまで持ち帰った仕事を続けていたが、翌朝は必ず早起きし、朝食の準備をしてから出勤していった。

毎夜、しんと静まり返った家の空気に、微かにコーヒーの香りが漂い始めると、私は必ず目を覚ました。コーヒーは、父にとって眠気覚ましのお薬。私たちのために家事をこなした後、濃いめのコーヒーを淹れて書斎に持ち込み、睡眠時間を削って仕事に励むのだった。かすかに寝床に届いてくるコーヒーの香りを、私はなんとか吸いこもうと、懸命に鼻の穴に意識を集中した。コーヒーを飲むことがまだ許されていなかった私には、憧れの香りだったし、そうすることで、父の献身に感謝の意を表せるような気がした。

父が母の代わりにを務めていた間、四歳年上の兄は、その父の代わりにしてくれられた。放課後のクラブ活動を制限して早めに帰宅し、私の宿題を見てくれた。敬遠していたはずのニュース番組にチャンネルを合わせ、一緒に見ながら私に、辛抱強く説明してくれた。

その兄が、毎朝コーヒーを飲み始めた。朝食には専ら紅茶を飲んでいたはずの兄。父が出勤していった後、その父が前夜に使ったマグカップで、薄めのインスタントのコーヒーを飲んだ。

「お兄ちゃん、どうしてコーヒー飲むようになったの？」
と訊くと、

「大人になったらやらなきゃいけないことがある。飲まなきゃいけないものもあるんだ」と、少し眉間に皺を寄せながら答えた。普段なら「お兄ちゃんはまだ子供じゃ〜ん」と生意気につつかかるはずの私だが、兄の眉間の皺には確かに、苦勞の絶えない大人を髣髴させる影が刻まれていた。私はまたこの時も、ただ黙ってそのコーヒーの香りを鼻から吸い込んだ。毎夜ベッドに届いてきた父の重厚なコーヒーの香りよりも幾分薄っぺらな「幼い」香りが入ってきた。

こうして母の入院中も、私はいつもと少し違うだけの「母」と「父」に恵まれて過ごし

た。母は、胃の半分を摘出する手術に無事成功し、ほどなくして退院、帰宅した。飛び上がって喜び母に抱きつく私を少し遠巻きにして、優しく見つめる父と、ほっと肩の荷を下ろした様子の兄が立っていた。

退院してしばらくの間、母は厳しい食事制限をしていた。飲み物と言えば、ひたすら日本茶か水を飲んでいた。退院後何度目かの検診で、順調な回復と太鼓判を押された日の夜、家族の揃った食卓に母は御馳走を並べた。仕事帰りの父には喉の渴きを潤すビール、クラブ活動で汗をかいてきた兄には炭酸飲料、そして私にはフルーツジュースを出してくれた。そして母は、自分の目の前に、父と兄が使っていたあのマグカップを置いた。自身は見なくても香りでわかった。兄のよりもっと薄そうな、申し訳程度に茶色いコーヒー。

「快気祝いの乾杯よ。一番好きな飲み物でしましょ」

バラバラの飲み物で、でも皆一様にとびきりの笑顔で、乾杯の声を挙げた。

父にとっては、眠気覚まし薬。兄にとっては、大人の仲間入りの登竜門。母にとっては、めでたい祝杯。家族の中で次々にバトンタッチされていったコーヒーは、私にとって家族の絆の象徴となった。

あれから実に四十年近くの歳月が経った。人生の半分以上を海外で暮らしている私は、実家の両親に毎週電話をかける。両親の声の向こうに、コーヒーを入れるサイフォンの音

が聞こえるのは気のせいだ。老老介護をしている両親に申し訳ないという私の気持ちを悟っているのか、父は私に毎週繰り返す。

「邦ちゃんの電話は私のビタミン剤。ありがとう」

私の声の効果が、家族が繋いだコーヒーの香りの域まで達することを願いつつ、私は両親に電話する前にいつもコーヒーを淹れる。温めたミルクを多めに足すのが私流。電話の後なかなか寝付けないのは、カフェインのせいなのか、それとも家族へ募る思いのせいなのか。

少し離れた台所で大学生の娘が、勉強の小休止にコーヒーを淹れる。その音を聞くとなぜか安心し、ようやく眠りにつける。今日もみんな元気できてくれてありがとう。明日も健やかでいられるよう、夢の中で、コーヒーで乾杯しよう。

一般部門

佳作

東京都 世田谷区

霊供膳と麦酒

稲葉 真季（会社員）

昼過ぎに降った雨のせいか、外はひどく蒸し暑かった。私は軒下に使い古しの皿を置くと、その上に芋殻を乗せ、マッチの火を近づけた。湿気を含んだ空気が手元にまとわりつき、あつという間に頼りない炎を消してしまう。数回繰り返した後、ようやく芋殻の一部が赤く染まり、細い煙が立ち昇った。

「なんで火をつけているの？」

近所の男の子が不思議そうな表情で、薄闇に浮かび上がった火の塊を見つめている。東京の住宅街で火を焚く姿は、子供の目には珍妙な光景に映るのに違いない。

「迎え火っていうの。お空にいる人たちが、これを見ておうちに帰ってくるのよ」

その子の手を引いていた母親が私に代って答えると、会釈をして通り過ぎていった。

芋殻が燃え尽きたら、家の中に戻り、霊供膳の準備に取り掛かる。かぼちやの煮物や空豆を、おままごと道具のように小さな漆器に盛り付けていく。出来上がったお膳を仏前に供え、私は手を合わせる。

「おかえりなさい」

こんな風に、お盆に御先祖様を迎えるようになってから、二十年が過ぎた。

子供時代、お盆が近づくとわくわくした。居間に備えられた精霊棚を飾る鮮やかなほおづき、ナスときゅうりで作られた牛と馬、回転木馬のように影絵が移り変わる盆灯籠。普段、お寺でしか会うことのない僧侶がやってくると、凜とした空気が玄関先から流れ込む。実家は観光地であり温泉宿を経営していたため、夏休みに家族で出かけることはできない。だからだろうか。いつもと違う厳かな雰囲気の家にいるだけでも私の胸は高鳴ったのだ。

お盆期間中、仏前に一日三回、お膳を供えるのは母の役目。

「私が死んだら、ご飯は要らないから、ビールだけは供えてね」

満室のお客さんのお世話で大忙しの中、お膳を作っていた母は、いつもそう言っていた。

父が世を去り、宿も畳んだ数年後のこと。母は突然再婚すると宣言して家族を驚かせた。

「私はお嫁に行くんだから、この家のお墓はよろしく。お仏壇も持っていかないからね」

再婚はめでたいことなれど、仏事は母に任せきりだった兄と私は途方に暮れてしまった。話し合いの結果、墓守は地元で暮らす兄、位牌は私が引き取ることとなった。しかしながら、東京にある私の自宅に大きな仏壇は入らない。御先祖様には申し訳ないけれど、

仏壇はサイズの小さなものに買い替えることにした。もちろん位牌や鈴を移して「はい、おしまい」というわけにはいかない。古い仏壇から新しいものへ、魂の入れ替えを行わなくてはならない。つまり、仏様の引越である。僧侶を招いて魂入れをしてもらい、魂が抜かれた仏壇はお炊き上げを依頼する。こうして我が家に小さな仏壇がやってきた。

そして迎えた最初のお盆。何十回と実家でお盆を過ごしてきたにもかかわらず、いざとなると器の並べ方すらわからない。逐一母に電話して教えを請いながら、必要な物を買って揃える。料理は御精進。中日のお昼はお赤飯のお握り。最後の夕食は天ぷら。会社勤めの傍ら私はあたふたとお膳作りをこなしていく。

「間違えたって、仏様は怒ったりしないよ」

大切なのは気持ちなのだ、母は言ってくれたけれど、結局、この年のお盆は、わくわくする余裕もなく、慌ただしく過ぎていった。

母に尋ねなくとも一通りの行事をこなせるようになるまで、数年はかかっただろうか。今では御精進の献立を考えるのも、夏の楽しみの一つだ。七年前からは、お膳の横にビールが供えられるようになった。器には母が好きだった胡麻豆腐や谷中生姜。

「お盆は貴女の所に帰らせてね」

晩年、遠慮がちに言っていた母が、どんな表情でビールを飲んでいるのか、想像しながら

ら私もお相伴に預かる。お盆は、いつしか私にとって、亡き人と語り合える儚くも貴重な夏時間となっていた。

送り盆の朝、最後のお膳を出し終えたら、器を一つ一つ和紙で包み化粧箱に仕舞っている。箱に記された納品日は昭和四十一年八月。私が産まれた半年後だ。盆膳は、この前年に亡くなった祖父の新盆の為に造られたものだった。私の誕生を心待ちにしながら、顔を見ることなく逝ってしまった祖父。孫が作るお膳は、果たして及第点をもらえただろうか。

お盆の行事もお膳作りも私の代でおしまい。五十年以上使われてきた漆の器は、あちこち塗りが剥がれている。私と同じ歳のお膳は、私の人生と共に役目を終えるのだろうか。

夕刻、芋殻を手に、まだ昼間の熱気が籠る外に出た。精霊牛に乗って出発を待つ御先祖様に語りかけながら、私はマッチを擦る。

「また来年もお待ちしています」

送り火の芋殻から一筋の煙が立ち、ゆらゆらと音もなく、天空へと昇っていった。

令和5年度 第9回 藤原正彦エッセイコンクール 概 要

■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

プロフィール

昭和18年旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。
そのほか、『国家の品格』『本屋を守れ』『我が人生の応援歌（エール）』など著書多数。
平成26年4月、姫路文学館長に就任。近著に『日本人の真価』。

■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和5年9月15日締め切り。

■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各1編。
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

■ 応募状況 … 応募総数 1,764点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	293点	171	122	293	0	0
高校生部門	869点	520	339	859	10	0
一般部門	602点	41	74	115	484	3
合計	1,764点	732	535	1,267	494	3

中学生部門：市外では、兵庫県宝塚市、三木市、赤穂市、神戸市から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は11校であった。

個人応募者は1人であった。

高校生部門：県外では、東京都、山形県、長野県、宮城県、愛知県、大阪府、福岡県、

広島県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は10校であった。

個人応募者は11人であった。

一般部門：北海道から沖縄県まで、全国から応募があった。

アメリカ、カナダ、フランス在住の日本人からの応募もあった。

■ 表彰式

日時：令和6年1月21日（日）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）

第9回 藤原正彦エッセイコンクール
入賞作品集

編集・発行 姫路文学館
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地
TEL (079) 293-8228

令和6年(2024年)1月21日発行